

【失語症の源流を訪ねて一言語聴覚士のカルテから】

(2014年4月30日発行 第1刷)

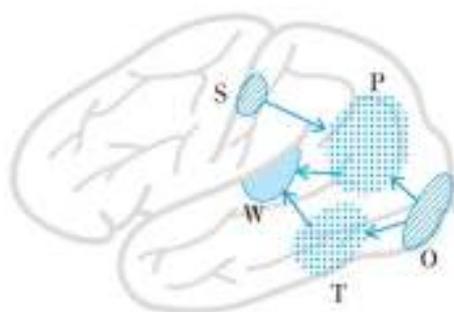
正誤表

このたびは、「失語症の源流を訪ねて一言語聴覚士のカルテから」をお買い求めいただきましてありがとうございます。(2014年4月30日発行第1版第1刷)

下記のような誤りが出ています。訂正して、お詫び申し上げます。

(2014年6月12日)

ページ、行	誤	正
14 頁右(2行)	因みに、当時脳室は細胞(セル、cell)と考えられていたため、脳室説は別名 cell theory とも呼ばれます。直訳すると細胞説ですが、生物学においてやはり細胞説という用語があり、まったく別の意味で用いられていますので、ここではセル説とします。	<u>因みに、脳室理論は別名 cell theory とも呼ばれます。cell(セル)とは「小部屋」という意味です。現在、医学・生物学の分野では、cell は細胞という意味で用いられていますので、ここではあえて日本語を当てずにセル理論とします。</u>
19 頁年表(下から 11 行)	ウィリス <u>「脳室理論」</u> を支持	下線部 削除
24 頁右：図(シュプルツハイムによる脳の地図)	人間のさまざまの	人間のさまざま <u>な</u>
31 右(7行)	<u>見</u> につまされる	<u>身</u> につまされる
41 頁右(下から 10 行)	1886 年には仲間と共に	<u>1878 年</u> には仲間と共に
49 頁右(1行)	ウェルニッケ・リヒトハイム	リヒトハイム・ウェルニッケ
59 頁左(下から 6 行)	「何」であるが	「何」である <u>かが</u>



- O : 後頭葉
- P : 角回
- T : 側頭葉後下部
- S : 体性感覚野
- W : ウェルニッケ領域